

ひとつとせ

奥田 菜津

登場人物

牧原 咲 ・ 森谷 芽衣
(ひとりで二役を兼ねる)

シーン1 春

開幕。放送が入る。

放送 生徒部から連絡します。これから呼ぶクラブの部長は、至急部員名簿を持って生徒部室に来なさい。野球部。美術部。空手道部。演劇部。生物部。繰り返しします。これから呼ぶクラブの部長は……

舞台の中央で、咲が名簿を握りしめ立っている。

咲 先生すみません、あと3日……う、じゃあせめて2日……1日！1日待ってください、1日でもいいですから。えっ、新入部員？いや大丈夫、入ってます、入ってるんですよ、でもあの、そう、今迷っている人がいるかもしれないから、だからその人の為にあと1日……！！

やがて、咲は落ち込んだ様子で部室に戻ってくる。

部室には机や椅子、黒板、ソファ等があり、脚本や小道具

などが散らかっている。乱雑な、演劇部の部室らしい雰囲気。

ソファには大きな犬のぬいぐるみが乗っており、部屋の奥のほうでは、観客には見えない形で、マネキンの頭部が転がっている。

部屋には窓がひとつあって、カーテンが開いている。窓の外には遅咲きの桜。

(桜の枝は今後役者が劇中で取り替えるので、簡単に取り外すことのできるものにしておく)

咲、部室のドアを開ける。立て付けが悪くコツが必要。閉める時も、力を入れないと閉まらない。咲は手馴れた様子でドアを閉め、電気をつける。

咲、ゆっくり名簿に目を移す。

咲 演劇部部員名簿 三年A組 牧原咲 以上。……やばい、このままじゃほんとに廃部……！！

机に置いたままだった携帯電話が鳴る。咲、手に取る。

咲 あっ、先輩からだ。

メールを開く。

咲 「新入部員何人入った？」……「何人」？

名簿を見てため息をつき、携帯を机の上に戻す。
落ち込んでみると、ソファに乗っている犬のぬいぐるみと
眼が合う。

咲 ふふ、誰も入らないよワン吉……。 (犬に詰め寄りながら)
でもさ、真剣にどうして入らないんだろうね？ 新入部員。勧
誘ポスターも貼ったし、ピラも配ったし、新歓公演こそでき
なかったけど、でも私、結構頑張ってたよね！

撫でたり叩いたり、犬をいじりながら、

咲 大体さ、顧問ももう少し協力的でも良いと思わない？ 練習
にも全然顔出してくれないし、相談にも乗ってくれない。さ
つきもね、廊下ですれ違った時にすっごい無愛想に「おい牧
原、名簿」だって！ ちよっとは私の気持ちも考えてくれても
いいじゃない！ 苦手な顧問に新入部員は0、こんなの絶対ひ
どすぎる！ そう思うでしょ？ ワン之助。

答えない犬に対してしばし沈黙。
いそいそと犬のところへ忍び寄り、後ろから犬を動かす。

咲 わんっ。

もとの位置に戻って、

咲 でしょう！？ …… あーあ、先輩のいた頃は楽しかったなあ。
前の顧問の先生は熱心だったし、あのころは部員が12人も

いたし……。 12人……。

名簿を見やって再びため息。

咲 ……ほんとにあの頃は楽しかったなあ。先輩もすごく可愛
がってくれたし。先輩が練習してる間に一人で賛助広告のお
願いしに行ったり、先輩が公演の申請しに行ってる間に一人
で脚本の追加印刷しに行ったり……。先輩が休憩してる間に一
人で皆の分のジュース買いに行ったり……。
い、いやあ本当に、まったくもって楽しかったなあ！。

携帯電話が鳴る。

咲 ……あ、また先輩だ。「返信はすぐ寄越せ」……。！！

慌てて、返信の文章をうつ。

咲 ご無沙汰してます先輩、大学はどうですか？ 高校は相変わ
らずです。新入部員は……。 ……0、です……。

少し悩んでから送信ボタンを押し、ため息をつく。

咲 あーあ、先輩は今頃、たくさんの演劇仲間と……。 うう……。

携帯電話が鳴る。

咲 うおっ、先輩だ。早っ。ええっと……。 (文章を読んで) ……

：はい、すみません。(更に読んで)……43!?!うそ、大学のサークルってそんなにいるの! いいなあ……もうっ、大学はこんなにたくさんいるのに、高校だとどうして見学にすら来ないの!?

突然ノックの音。

咲 ……見学者!?

咲、身だしなみを整え最上の笑顔を用意してドアを開く。
内側からドアを開ける時もコツが必要。

咲 はい!……え、いえテニス部なら隣ですけど。いえ、では……。

ドアを閉める。

咲 なんだ、隣かあ! ……隣……。

隣接するテニス部の部室に意識を向け、壁にそっと耳を当てて。隣の部室から聞こえる色々な声に反応して、頷いたり、感心したりする。

しかし、はっとして壁から離れる。

咲 何やってんの、私。

しかしやはり気になり、もう一度耳を壁にあてる。

突然、ノックの音。我に返って離れる。

咲 ど、どうせ隣でしょ。

ノックの音。

咲 うるさいなあ。

なおも続くノック。

咲 もーっ、(ドアを開けて)テニス部は隣です!!

……え?……見学ですか?はいっ!もちろんです! どうぞ入ってください!!

咲、見学に来た一年生を部室に招き入れる。

窓の外の青い空が、やがて夕焼け色に変わる。

夕焼けをバックに、咲はドアを開けて、帰っていく一年生を見送り手を振っている。

ドアを閉める。

咲 ……初見学者、二人ゲット!! 入ってくれるかな、入ってくれるよね!

あ、そうだ、ミカコにメール!(携帯電話を取って)うちに、見学、来てくれた、よ、っと。名前は、A組の、山野ユリちゃん、B組の、吉川ナナちゃん……よし、送信!

あ、部員名簿。気が早いかな、でも早く提出しなきゃだし。(名簿に記入) できた！(名簿を見つめ、感無量で) ううう嬉し
いようワン蔵おほ！

大喜びで、犬を勢いよく抱きしめる。

咲 部員さえ入れば……！

夕鶴、オペラ座、ロミジュリ、……全部できるんだ！

うずうずしている。そしてついに、

咲 ちよ、ちよつとやってみよう！

衣装を突っ込んである段ボール箱から、マントとヴェール
を取り出す。

咲 よし、シェリー！相手して！

部室の奥からマネキンの頭部と楽譜立てを取ってくる。

マネキンの頭部を楽譜立ての上にはめ、それにヴェールを
かけてジュリエットの代わりにする。

ジュリエットを机の上に乗せる。

咲 ミュージック、スタート！

部室内のMDコンポのスイッチを入れると、BGMがなり
始める。

マネキン相手に、芝居を始める。

咲 おおジュリエット。貴女がこの名前をお気に召さないの
であれば、恋人とでも何とでも、ああ、ただ愛しい人よとでも、
好きなようにお呼び下さい！

マネキン無言。

咲 いいえ、愛が私を導いたのです。私は水先案内人ではあり
ません。しかし、たとえあなたがはるかな海に洗われた広々
とした岸辺にいらようと、私は貴女という宝を求め、必ず旅
に出ることでしょう。

咲 ……。……。ここジュリエットの長ゼリなんだよね。(タイ
ミングを計って) ああ！なんと幸せなことでしょう！私は今
ここで誓います！貴女への愛を！

机の傍に置いた椅子に足をかける。

咲 いいえ！誓わせて下さい。

机に足をかける。

まるでロミオがバルコニーに上がっていくかのよう。

咲 ジュリエット……。

机(バルコニー)に上がりきる。

咲 ああ！ジュリエット！

マネキンを抱きしめる。するとマネキンの頭部が楽譜立てから抜け、興ざめする。

咲 ……無理。だってこんなの全部ロミオの独り言じゃない。
ああ、ユリちゃんにナナちゃん、早く入ってくれないかな。

携帯電話が鳴る。

咲 あつ、ミカコだ。

携帯電話を手にとってメールを読む。

咲 「その二人なら今、うちに入部届け出しに来てるよ？」
…マジで…？お、落ち着いてメアリー。落ち着いて考えよう、うん。

衣装等を片付けながら、

咲 えっと、ミカコって美術部だよ。うちの何が負けたんだと思う？ピラもポスターもうちのほうが多かったよね、あと何が…。…そういえば、美術部ってすごい展示会してた。大きい絵とか彫刻とか置いて、新入生いっぱい見てきた。やつぱそれかなあ、(マネキンに詰め寄って)アピールの違い！？

ああ、やつぱりやればよかったのかな、新歓公演。でも2人ともあんなに乗り気だったのに…ちよっと私、美術部行ってくる！

ドアを開けて出て行こうとするが、ドアノブが外れて閉じ込められる

咲 え…？ちよつ、出してー！ 誰かー！！

シーン2 夏

蝉の声の中、咲は暑さでうだっている。
窓を開ける。蝉の声が煩くなる。

咲 はあ…。

窓の外の桜の枝を取り外す。

咲 春が過ぎて、

部室内に用意していた、青々とした緑の葉の枝につけかえる。

制服のブレザーを脱ぎ捨て、ブラウスの夏服状態になる。

咲 夏が来たのに、

蟬の音がうるさくなり、また小さくなる。

咲 私はやっぱり一人きり……。

机の上のマネキンが目に入ったので、近くの衣装入れに埋まっていた麦藁帽子をかぶせてやる。満足げに頷いて、我に返る。

咲 でも私だってこの数ヶ月、何もしなかったわけじゃない！

机の上のピラをとっては投げ、とっては投げしながら、

咲 ピラ、一号！二号！三号四号五号六号最新号！

マネキンの頭部を椅子の上に置き、マネキンに向かって話しかける。

咲 あなた、中学のとき、演劇部だったそうじゃないですか。高校でもどうですか、楽しいですよ（マネキン、くるりとそっぽを向く）……あ、あの……あの……ちよつと……！あの……！

よよよと泣き崩れる。

咲 それなのに、やっぱり一人きり……。あーあ、やっぱり公演やっただほうが良いのかな。

部室のドアを見る。開けてみる。やはり見学者の姿は見えない。

ドアを閉める。首をかしげながら、

咲 ドアノブ直ったのに、なんでたてつけは悪いんだろう。

机に戻って、

咲 ……受験生らしいことでもしよう……。

かばんから、問題集や教科書を取り出し、勉強を始める。

咲 私英訳苦手なんだよね……。問一。君がどんなに頑張っても、すべて無駄だ。

沈黙。

咲 次々、ええつと……。問二。私が望めば望むほど、希望は失われていく。

沈黙。

咲 分かんない分かんない。「問三。諦めることを知らないことは……とても愚かなことである」。うう！？もう！！

すると先ほどばらまいたピラが目に入る。

咲 誰よ、こんなにビラ撒き散らしたの。

ビラをすべて拾って片付けていると、雑多にものが詰め込まれたダンボール箱を発見する。

咲 きつたない……なにこれ。

箱をひっくりかえすと、いろいろなものが出てくる。正体不明の紙袋、額、衣装の山、古い脚本の束……。

咲 何だっけ？これ……。

紙袋をとりあげ、中身をひとつずつ取り出し、床の上に並べてみる。辞書、時計、教科書、体操服、体育館シューズ。

咲 え？これってもしかして……。

辞書の後ろに、持ち主の名前を発見する。

咲 ……先輩のだ！わすれもの！？ 何それ！ 何ヶ月たつてるの！？……あれ？

辞書の中にメモが挟まれている。

咲 メモ？

メモを開く。

咲 「これ演劇部に寄付ね。BYやさしい先輩」。

……厄介払い……？先輩の馬鹿ー！ 取りに来ーい！！！！……とは本人にはいえないけど、後で丁重にメールを送っておこう。

中身を紙袋に戻し、箱へ乱暴に入れる。

ひっくり返したもののの中で、今度は別のものが目に付く。

咲 何コレ。

手にとったのは、賞状をおさめた額。

咲 演劇コンクール、最優秀賞？……わあ！すごい……六年も前……。六年前ってそんなに強かったんだ、へえ……。

すっかり機嫌を直す。

額を丁寧に机の上に置き、箱から出てきた衣装等を片付ける。

そして、同じく箱から出てきた脚本も片付けようとする。

咲 ああつ、(マネキンに脚本を見せながら) 見て見てこれ、私の初舞台の脚本！わー、懐かしい。そうそうこの役！私やったの！台詞二つしかなかったけど舞台に立つときは緊張したなあ……ほかにも何かあるかな。

また別の脚本を手にとる。見慣れない、黄ばんだ脚本。

咲 この脚本いつの？…：…：…マーカーでいっぱい印つけてる。いっぱい練習したんだろうなあ…：…：…あれ。

脚本の束から、今度は脚本とは少し違ったものを発見する。手にとって開いてみると、写真がたくさん貼られている。

咲 アルバム？わっ、面白そう。

うきうきとページをめくっていく。

咲 へー、五年前…：…：…誰だろコレ、稽古してる。あつ、先輩発見！わーっ一年生の先輩だ！何だか可愛い！弄られてるし！これが弄る側になるんだから時間の流れは残酷だよねえ。ああ！ちよつ、見て見て見て見て（犬に見せ、マネキンを指差し）、ジョセフィーヌ映ってるよ！へえー。あ、私だ！そうそう、このとき初めて名前のある役もらったんだよね。あ、終わっちゃった。こんなのがあるなんて知らなかった。

アルバムを閉じ、脚本などもすべて片付けて、箱を元の位置に戻す。
先ほど机に置いておいた賞状を手に取り、きよろきよろしてから、壁に賞状をかける。

咲 すごいよね。私の知らない人たちがここでいろんなことして卒業していったんだね…：…：…こう考えるとなかなかロマンじゃない？

ふと、咲の表情が変わる。
ゆっくりと、部室全体を見渡す。

咲 …：…駄目だよ。終わらせちゃ。そうだよ、このまま廃部になんてさせるわけには行かないんだから！なんとしても部員獲得しなくちゃ！…：…：…となると、やっぱ一人劇か。公演は…：…。

鞆からスケジュール帳を取り出し、めくりながら、

咲 夏休みは夏期講習、さすがにまずいよね。となると…：…：…文化祭公演…：…。（文化祭までの日を数えて）あと九週間、よし、それなら！…：…ん？でも、ということは秋までは引退出来ないってことだよ。それはちよつと…：…：…どうしよう、受験勉強。お母さんもなんて言うか…：…：…。だけど…：…。

再び部室を見回し、賞状をじつと見つめる。
暫く悩んでから、

咲 …：…夏期講習中は演劇のことは考えない。だから練習はその後から始めると。で、文化祭が終われば完全に受験モードに切り替える。よし、そうしよう。

咲、机の上の勉強道具を片付け始める。
問題集のある一問に目が留まり、読み上げる。

咲 「問四。我々ができる限りの努力をするならば、必ずそれは
実を結ぶ」。……よしっ。

問題集などを鞆に片付ける。
黒板にチョークで「63日」と書きながら、

咲 文化祭まで、あと、63日！よし！

カーテンを閉めて、電気を消す。
部室を出て鍵をしめた後、ドアの「演劇部」のプレートを
眺めて、

咲 演劇部、フアイトー！！！

走り去る。

シーン3 秋

音楽と共に、大きな段ボールをもった咲が駆けてくる。部
室に入って電気をつける。
マネキンの麦わら帽子を脱がせ、ベージュのスカートにか
える。
ダンボールから紅葉した桜の枝を取り出し、窓の外の青々
とした枝と取り替える。

音楽にあわせて、文化祭準備のパントマイムをしながら、

黒板に書いた文化祭当日までの日数を少しずつ減らしてい
く。

黒板の数字を「7」に書き換えたところで、音楽がフェー
ドアウト。

咲、かばんから、文化祭パンフレットを取り出し、犬やマ
ネキンに話しかける。

咲 見て見て、今日やっと配られたんだよ、パンフレット。脚
本も完成したし。やっぱ創作にして良かったなあ。こう、自
由な自己表現って感じをアピールできるし！これで文化祭に
は完全燃焼、部員獲得、晴れて引退、受験生！

ぱらぱらとパンフレットを見る。

最後のページまでいくが、演劇部公演の案内が無い。
今度は終わりのページからめくるが、やっぱり無い。

咲 ……あれ？

机の上にパンフレットを開いて細かくチェック。

咲 えと、一日目、二日目……。

焦りが生じる。

咲 ちょっとまって、何で？何で？ど、どうしよ……。

何度も確認するが、無い。

咲 お、落ち着いて咲。えっと、とつ、とりあえず顧問！

携帯電話を取り、顧問の番号へかける。

咲 この際苦手とか言ってるんじゃないし……。

顧問が電話に出る。

咲 あっ！先生、演劇部の牧原です！あの……え？あ、忙しい？すみません……あのでも少しだけ……。今日配布されたパンフレットのことなんですけど、演劇部の公演がどこにも無いんです。何かの手違いかと思って……へ？申請書？何それ……あ……。そう言えば去年も先輩が出してた……忘れてた！はい、出してません。ど、どうしよ……でも毎年やってますよね？やってるんです、それなのに生徒部、何も聞いてきてくれなかったんですよ。え？聞いてきた？今年はしないのかって！？え、で、先生、出るって答えてくれなかったんですか！？……そんな、勝手に思い込まないで下さいよ。一人しかいないからって、私ずつとやるつもりで……。先生、今からその申請書出せば通りますか！？……そこをなんとか！……わかりました、生徒部に聞きます。

電話を切る。

咲 ……どうしよう……。私、すっかり……。

走り去る。

咲、生徒部室に駆け込む。

咲 あの、生徒部の主任の先生いますか！？え、教員室？あの、とりあえず誰でもいいです演劇部です！文化祭のことなんですけど……え？いえ違います、今年も演劇部は出ます……それは……ごめんなさい、提出すつかり忘れてて。でも出ないって言うのは顧問が勝手に……おねがいます！どうにか時間取ってください！そこをどうかして……お願いします！え、そんな、先生！

駆け出す。今度は教員室に駆け込む。

咲 先生！生徒部の主任の先生いますか！？あっ、いた先生！あの、今から申請するんじゃないや間に合いませんか！？お願いします、これに部員獲得かけてたんです！パンフ……？じゃ、じゃあ刷りなおす分、私自腹切りますから！お願いします！一人だって演劇は出来るんです！脚本だって衣装だって音響だってもう完成して……。

駆け出す。今度は校長室に駆け込む。

咲 校長先生！演劇部の牧原と言います！先生からお願いしてみして下さい！一年生が欲しいんです、演劇部存続の危機なんです！あの、ほんの10分でも5分でも良いんです！お願い

します！

駆け出す。再び教員室に駆け込む。

咲 先生！本当に、この通りです！どうしてそんな風に言うんですか、色々面倒なことがあるなら私がやりますから！え？
…それ、ちゃんと自分で交渉行きますよ。他のクラブやクラスに。お願いです、何とかやらせてください、せんせ！
…っ。

先生から言われた言葉に、うなだれる咲。

咲 ……はい。提出しなかったのが悪いんです。……ごめんなさい。

顔をまっすぐ上げる。

咲 それは、分かっているんです。でもお願いします。どうか、お願いします……っ！

文化祭当日。

演劇部の部室、咲はソファに座ってぼんやりしている。
窓の外からざわめきが聞こえる。

放送 次は2年D組による演劇、「オペラ座の怪人」です。この
為に毎日一生懸命練習したというD組、その団結力とチ

ームワークで最高の出来に仕上がったとのことです。ご
ゆっくりご鑑賞下さい。

拍手と歓声の音が遠くで響いている。

咲、立ち上がって窓の方へ行こうとする。
が、その途中で机の上の脚本が目に入り、手に取る。

咲 ……これ、無駄になっちゃったな。

脚本を、床へ放り投げる。

明るい調子で、

咲 でももったいないな。脚本コンクールにでも出そうか？
いところまでいくんじゃない？最優秀賞狙っちゃおうか？

犬を見る。マネキンを見る。

嫌な間。

咲 ……もーっ、カトリーヌもワン太も、そんな暗い顔しない
でよ！確かに文化祭は無理だったけどさ、もう仕方ないじゃ
ん、私が忘れてたのがいけないんだから！そりゃあ……勝ち
に決めちゃう先生も先生だけ……でもね、これからまだ
ピラ配りとかポスターとか、出来ることはたくさんあるわけ
よ。望みはまだ絶たれてないの！だからね、そんなに悲観す
ること……。

嫌な沈黙。犬やマネキンは、咲の方を見つめている。

咲 ほら…：脚本だってコンクールに出せば入賞するかもしれないし、衣装や小道具も次の代に受け継がれれば無駄にもならないし…：卒業までまだ日はあるんだからさ、まだまだ頑張れば良いじゃない。落ち込む前に勧誘勧誘！ね！だから…

沈黙。

咲 だから…：。

咲、泣き出す。

頬を伝う涙をぬぐうが、いつしかその手も止まり、嗚咽だけが静かな部屋に響く。
やがて、体育館からD組の劇への歓声が聞こえてくる。

咲 あ…：。

咲、顔を上げる。呆然と立ちすくんで、ゆっくり窓のほうへ。

窓を開け放つ。大きくなる歓声。それをじっと聞き続ける咲。

咲 …：そっか…：私、そうじゃなくて…：。

床に放り出された脚本に駆け寄る。
脚本を拾い上げ、見つめた後、ぎゅうっと抱きしめる。

咲 やりたかったんだ。

そして笑い出す。

咲 なーんだ、そっかそっか…：。

いとおしそうに脚本を抱きしめながら、

咲 …：どうして、忘れてたのかなあ…：。

シーン4 冬(1)

開け放しの窓から、木枯らしが吹きこむ。

咲 …：さむっ…：！

春から夏に移るときに脱ぎ捨てていたブレザーを拾い上げ、寒そうに着る。

窓の外の秋の枝をとって、冬の枝に替える。そして窓を閉める。

マネキンには毛糸の帽子をかぶせてやる。
かばんの中から二つの封筒を取り出して、

咲 じゃんっ！ホラ見てエリザベス、ついに来たの！創作脚本コンクール結果…：と…：模試の結果…：。

創作脚本コンクールの方はね、なかなかいい線いってるはずだと思ふのよ。ただ模試は……。：：：よし、後味の悪くないように、恐ろしい方から先に見よう！

模試結果の封筒を開ける。

ドキドキした様子でそれを見る。

咲 え？えー！やった、上がってる！（マネキンに見せ）見て見てこの数学！やったああ！良かった、これなら心置きなくお母さんに見せられる。よし、今日の私はついてるぞ！次次！

丁寧に模試結果を封筒に戻す。

コンクール結果の封筒を手にする。

咲 ああ、どうだろう。最優秀は無理だとしても優秀賞、せめて佳作！

うきうきと封を開け、中身に眼を通す。

ぼいと封筒を放り投げる。

咲 ま、まあ、脚本コンクールなんかで脚本の真価は測れないって！それに、私はこんなものに構っていられるほど暇じゃないのよ、受験まではもうあと少しなんだから！

帰り支度をしながら、

咲 あんなに上がってるとは思ってたな。なんだかやる気出てきた！

ふと壁の賞状を見やって、

咲 ……結局最後まで私一人きりか……。でもま、私が卒業しても廃部までは一年間猶予があるみたいだし、今大切なのは受験だからね。

犬と目が合う。犬に近寄りながら、

咲 違うよ、別に無理やり我慢してるとかじゃないよ？だってね、ワン之丞。いい？大切なのは、部員獲得とか演劇部存続とかじゃなくて、もつとそれ以前の……。

突然、ドアの外で物音。

咲 入部希望者！？

ドアを開け、外を見る。誰もいない。

がっかりして戻ると、犬とマネキンとぼつちり眼があう。

咲 ……い、いやあ、その。ほら！仕方が無いっていうのと諦めるっていうのとはまた話が全然違うよね！あはははは。（携帯電話の時計を見る）あつ、やばつ、塾塾！遅刻するー！

慌てて鞆を持ち、電気を消してカーテンを閉める。

ドアを開け、走って出て行く。

シーン 5 冬(2)

卒業式。

胸の花につけ、卒業証書を持った咲が、部室に入ってくる。

電気をつける。

咲、部室の机や椅子を丁寧に並べる。

マネキンと目が合って、少し気恥ずかしそうに、

咲 えへ。なかなかの晴れ姿でしょ？似合う？

ふと気づいて、マネキンの毛糸帽子に、自分の胸の花をつけてやる。

咲 うん、可愛い！

沈黙。犬を撫でて、

咲 ワン吉。

マネキンを撫でて、

咲 シェリー。

犬とマネキンに向かって、

咲 ……ありがとう。

机の上に出されたままの、文化祭脚本に目を落とす。持ち上げ、ばらばらと開いて見る。

そして、再度机の上に、丁寧に置く。

咲 何も後悔はありません！今までありがとうございました！

部室全体に対して、深々とお辞儀をする咲。

電気を消し部室を出て、鍵をかけ立ち去ろうとする。が、立ち止まり、振り返る。

ドアにかかった「演劇部」のプレートをじっと見つめる。暫しそうしたあと、今度こそ振り返らずに立ち去る。

シーン 6 次の春

部室の前にやってきた、新一年生の芽衣。

部室のドアのプレートを確かめて、鍵を開ける。

しかしなかなかドアが開かず、苦勞する。

結局何とか力づくであけて部室へ入る。

今度はドアを閉めようとするがそれも上手くいかず、苦勞してようやく閉める。

電気を探してつけ、カーテンを開ける。

窓の外には、去年と同じ桜の花。
暫く窓の外を眺めた後、部室内を振り返った芽衣は、机の上のマネキンと目があつて驚く。

芽衣 ……？

開閉も困難なドアとマネキンを交互に見比べる。
大きな犬のぬいぐるみも目に入る。
部室全体を見渡す。机の上に置かれた脚本を発見。
ソファに腰掛けて、脚本を読み始める。

やがて、パッヘルベルのカノンが流れ出す。
ある旋律が何度も繰り返され、
それがいくつも追いかけてあつて、重なりあつて、
ひとつのメロディがつながっていく。

窓の桜。壁の賞状。犬、マネキン、そして脚本。
かつてこの場所で咲が受け継ぎ、守り育ててきたすべて
は、今確かに次へと受け継がれたのだ。

* 劇中の「ロミオとジュリエット」の科白は、以下の文献
を参考にしました。

『TALES FROM SHAKESPEARE』

CHARLES AND MARY LAMB 著

内堀八郎 編註

(續文堂 1934年)

『シェイクスピア物語』

チャールズ・ラム 著

松本恵子 訳

(新潮社 1952年)

『ロミオとジュリエット』

ウィリアム・シェイクスピア 著

小田島雄志 訳

(白水社 1983年)

—幕—